

第2部	199
第1章 日本文學中3・11東日本大震災之「挫敗」 —與傳統「無常觀」救贖間之關聯—	201
第2章 烏爾利希・貝克「風險社會」論述下的日本 原發文學書寫—對應出311東日本大震災重創 日本後的「改變」—	231
結語	271
テキスト	283
参考文献	285
初出一覽	295

序文

2011年3月11日（金曜日）14時46分に日本の東北地方で発生した日本観測史上最大のマグニチュード9の大地震、それに伴う津波襲来、原子力発電所の放射性物質の漏洩が引き起こした「三位一体の受難」¹（地震・津波・原発事故）、複合型災害のため、日本は戦後未曾有の災難・災害に見舞われることになった。緊急状態中、日本政府は早速2011年4月1日の閣議で「東日本大震災」とし、それ以降、メディアもそれに倣い、一本化した。それで、「東日本大震災」の名称が世に誕生し、「3・11」と通称されるようになった。その後、「福島」は原爆投下地のヒロシマ、ナガサキと同じように、平仮名で表記されることなく、片仮名の「フクシマ」と表記されることにより、烙印された深刻な事態を歴史と共に歩む特

1 マニユエル・ヤン(2012.2)「負債資本主義時代における黙示録と踊る死者のコモンズ」河出書房新社編集部編『歴史としての3・11』河出書房新社 P93 では、「3・11における三位一体の受難（地震/津波/原発事故）は死の覚悟をわたしたちに植え付けた」とある。

殊な運命を担うようになった。

その時、日本近代の文豪漱石を研究してきた論者の頭にすぐ浮かび上がってきたことがある。それは、かつて中国の文学、イギリスの建築よりも英文学を専攻に決めた漱石の心情を思い出したからである。いくら立派な建物であっても、時が経てば老朽し、後世に残ることは難しく、文学を百年の志業とするなら、末永く後世までに続けられるということである。また、3・11 発生後、心が痛み、悲しみに耐え切れない日本国民が中世の名高い名作『方丈記』、『徒然草』、『平家物語』を愛読し、心の拠り所を求める風潮を見ると、文学の持つ力の偉大さを改めて思い知らされるようになった。

また、3・11 発生後、論者は毎日テレビの前で釘づけとなり、日本の様子を心配して見ていた。と同時に、このような一大惨事の 3・11 により、日本文学が一体どのように移り変わっていくか、に興味を抱くようになり、このテーマは長い間頭にこびついてなかなか離れなかった。そこで、3・11 をきっかけに、日本の原発文学を

研究課題とし、根気強く今まで丹念に続けて来た次第である。

「原爆文学」は常に聞き慣れた言葉であるが、「原発文学」を選んだのは、それなりの理由がある。実は、衝撃的な 3・11 の発生時、日本ではしばしば「原爆」と「原発」の言語の使用に混乱が起きたそうである²。3・11 を契機に「原爆」と「原発」との区別について、広瀬純は「原発」とは制御された「原爆」だというのはあくまでも詭弁に過ぎないと批判した³上で、「つねに未だ到来しない「時限爆弾」という資格においては原発と原爆とを分け隔てるものなど何ひとつない」⁴と指摘している。このように、日本社会は、大災害をもたらすという点では

2 神山修一(2012.2)「福島のだブルバインド」河出書房新社編集部編『歴史としての 3・11』河出書房新社 P123 では、「親は何度も原発を原爆と言いついて間違えていたから、それなりに切迫した危機感を持っていたのだろう」とある。

3 広瀬純(2011.7 初 2011.6)「原発から蜂起」河出書房新社編集部編『思想としての 3・11』河出書房新社 P192 では、「原発と原爆の区別は前者が「制御された」後者であるということに存するとよく説明されるが、(東電もそのウェブサイトと同様の説明を行っている)、これは詭弁に過ぎない」とある。

4 前掲広瀬純論文 P193

「原爆」も「原発」も共通しているという本質に3・11を通して気づいた。「原爆文学」については、積み重なってきた膨大な研究成果がある。それに対して、「原発文学」についての研究成果は、全くないとは言えないが、それほど数多くはないのが現状である。3・11以降、原発をテーマにした創作、またそれについての研究が一気に盛り上がった。しかし、3・11以前にも既に先蹤となる作品が存在している。本書では、「原爆文学」とは異なり、3・11以後、「原発」（反原発、脱原発）を主題としたこれらの文学創作を「原発文学」と広義的に定義した。また、3・11以前に「原発」に触れた創作も「原発文学」の先蹤として認め、「原発文学」の範疇に入れることにした。この委細は、本書にある第1部第2章を参照されたい。

本書の題名を『日本原発文学の探求—文学の力を信じて』としたが、第1部には日本語で書かれた5章を収め、第2部には中国語で書かれた2章を収めた。収録されたこの7章は総て2011年以来、日本の原発文学を研究課

題として続けてきた研究成果である。書かれた言語の相違は確かに考慮すべき点だったが、グローバル化社会においては、一国、一地域で起きた災害は、必ずしも一地域に限らない厳しい現状を考え、より多くの方々・読者・地球人に原発のテーマに関心を持ち、本研究成果を読んでもらいたいと希望し、敢えて日本語で書かれた研究論文だけではなく、中国語で書かれた研究論文を合わせて本書に収録することにした。それは、3・11発生時に文学創作を通して、文学の力を頼りにその苦難の時期を凌いできた人々の生の声、いわば人類の財産に値する声に耳を傾けてもらいたいからである。

以下、簡単に各部の章立てについて説明する。

第1部の第1章と第2章では、複数の作家による創作を収録した『それでも三月は、また』（2012.2、講談社）をテキストにし、ショッキングな3・11に対する同時代作家が持つ共時的ビジョンを最大公約数的に把握し、日本文学に生じた振幅を見極めることを目的とした。『それでも三月は、また』には、17篇の創作が収録されてい

る。発行日からは、3・11が間もなく1周年を迎えるに当たって刊行した意図が読み取れる。第1章では、「根源的な喪失」の課題を3・11以後の日本文学の表象として纏めた。一方、第2章では、「原発」の課題を3・11以後の日本文学の振幅として纏めた。

第1部の第3章では、文学作品ではないが、「被災地」の被災者たちの生の声を聞く目的で纏められた数少ない著作の中、長期にわたり数多くの被災者に現地取材し、纏めた『それでも、生きる。NHK取材班が聴いた被災地3000人の声』(2012.12、イースト・プレス)、『原発避難民慟哭のノート』(2013.3、明石書店)は、より被災者の気持ちに一層寄り添うことが出来る資料と思われ、この2作品をテキストに3・11震災によって形成された日本文化中での特に重要視された故郷への思いの内実を検討することにした。

第1部の4章では、故郷の観点をさらに3・11以前に出来た水上勉の『故郷』に応用した。原発問題に注目して書かれた作品は、実は3・11発生後、初めて出たもの

ではない。3・11以前に書かれた水上勉の『故郷』(1987-1989連載、1997単行本、集英社)はトポロジーとしての「故郷」を描くと同時に原発言説を交えている作品である。水上勉の『故郷』ほど、「故郷」の主題を「原発」に密着に結び付けて描いたリアルな小説は他に類を見ない。原発による辺境・地方経済の活性化は、人間を取り巻く自然との対話の話題としても現在も進行形のテーマと言える。そして、第3章の故郷の話題に引き続き、また、近年、大いに進んできている人間を取り巻く大自然との対話研究「ネイチャーライティング」(nature-writing、環境文学)でも重要視している「場所の感覚」の視点から、3・11以前での原発言説が入り交じった水上勉『故郷』を中心に、人間存在の根源である故郷の位相を探求することにより、原発によって生じた生態・環境との関係及びトポロジーとしての「故郷」像の構築を試みることを本章の研究目的とした。

第1部の第5章では、同じく未来像を描く手法を採った2作品、3・11以前に未来像を描いた豊田有恒の「隣

りの風車」(1985)と、3・11以後に未来像を描いた多和田葉子の「不死の島」(2012)を比較対象とし、生態・環境との関係性を究明し、原発議題をめぐる作家の文学的関心と実践の軌跡を辿ることにした。原発反対(脱原発)あるいは原発賛成の、二者択一的課題に迫る日本原発文学像の究明を総体的に視野に納めて、考察を進めることにした。

日本語で書かれた第1部に続いて、中国語で書かれた研究成果を第2部に収めた。第2部の第1章は、3・11発生直後、底流していた無常観が日本全国で改めて浮上し、『方丈記』、『徒然草』、『平家物語』を求めて読んだ日本人の様子を見て、気づいたテーマである。第1章では、3・11が起きたため、日本文学で伝統的に継承されてきた無常観がどのように再浮上し、変わったかを研究動機とし、考察を進めてきた。

第2部の第2章では、地球全体の生態環境・人類に想像を遙かに超えた過大な影響を与えると警鐘を鳴らしていた1986年刊行のウルリヒ・ベック(Ulrich Beck、

1944-2015)の『危険社会—新しい近代への道』の著作を参考に取り上げた。3・11発生後の核エネルギーがもたらす危険・事故は、ベックの予想を改めて再認識させ、再び国際社会及び日本社会で危機としての原子力の問題が脚光を浴びるようになった。当書では、「危険として捉えているものはまずなによりも、直接は人間が知覚できない放射能」⁵と指摘し、「原子力時代の危険の脅威によって人類史上顕著な衝撃を被った。そして、この危険の脅迫によって(中略)国籍、空間、時間という概念が従来の意味を失ってしまったのである」⁶と言い、放射線と言った「新しいタイプの危険は多くの場合人間の知覚能力では直接には全く認識できな」⁷いため、「子孫の代になってその弊害が顕著となる場合もある」⁸と主張したベックの論説を特徴とする。

さらに、『危険社会—新しい近代への道』で力説した

5 ウルリヒ・ベック著・東廉・伊藤美登里訳(2011・初1998)『危険社会新しい近代への道』法政大学出版局

6 前掲ウルリヒ・ベック著・東廉・伊藤美登里訳書 P3

7 前掲ウルリヒ・ベック著・東廉・伊藤美登里訳書 P35

8 前掲ウルリヒ・ベック著・東廉・伊藤美登里訳書 P35

ウルリヒ・ベックの論説よりも早く、1971年に刊行された『The Closing Circle』⁹でバリ・コモナー(Barry Commoner、1917-2012)は、生態が閉鎖され、循環している存在だと主張している。第2部の第2章では、両者の論説を盾に、3・11発生後に発表した『それでも三月は、また』(17篇作品収録、鈴木哲発行、2012.2、講談社)と、3・11発生前に発表した『日本原発小説集』(5篇作品収録、柿谷浩一編、2011、水声社)を対象に、放射線が大自然に与える影響に注目し、「原発賛成」、「原発反対」のはざまに立たされた人間模様に迫っていく。

以上の7章により、ヒロシマ、ナガサキのような原子爆弾の投下による戦争の惨禍ではなく、国策宣伝にある平和に使われるはずの原子力発電が、地震、津波による放射性物質の漏洩のため、とりかえしのつかない生活上の苦難に苛まれている人々が発した生の声を、文学の力

9 第2部第2章の使用言語が中国語のため、Barry Commoner 著作の引用は、侯文蕙譯《封閉的循環-自然、人和技術》(The Closing Circle: Nature, Man, and Technology) (吉林:吉林人民出版社、1997)による。

を信ずる信念に基づき、『日本原発文学への探求』の一冊に纏めた次第である。